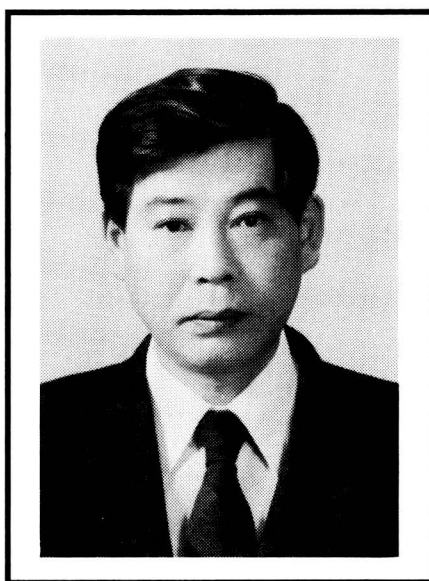


小山睦夫氏を偲ぶ

桑本 融*



研究者は毎日が春であった。朝から談笑の輪が途切れることはなかった。隔離されたのか、放置されたのか、自由に物を考え行動するよとの配慮だったのか、昭和30年代前半の大学院生は別棟の研究室で、毎日1回石橋雅義先生からの来室を待受ける以外、研究しようが遊ぶのが全くの自由であった。本館の重松、藤永、山本勇、永井の各先生方は余程のことがない限り、日常の研究生生活に立入ることはなかったし、時折、森井ふじ氏による石橋先生の御意向伝達、週一度のミーティングでの訓示を拝聴することを除けば、自分で考え行動するか、メダサの当校並に仲間うちで、発意、批判、討論をしなえればならなかった。

当時、私共の研究室（大部屋16号室）では、問題提起が故小山睦夫氏によって始り、佐藤昌憲氏（理京都工織大、繊維学部長）によって論理の柔盾が指摘され、笑いに包まれるのが常であった。

小山君は直親の鋭い人で、結論が先にあり、発想と結論を結ぶための大胆な仮説と論理は、多くの人を煙にまいたり、吃驚させていた。筆者も何か不思議な論理だと思いながらも、にこやかな笑顔と話術に引き込まれ、酔わされ、後で、引掛ったと悔むことも多々あった。しかし、他意がなく、人柄の良さが滲んだ発想には親しみがあがり、逆に、小山君の話を期待するようになっていた。

だらかで、屈託のない小山君の性格は数多くのエピソードと共に脳裏に焼きついて離れない。夏、白浜での海洋観測実習での帰り、平草原でのホテルでお茶を飲もうということになり、山歩きの好きな小山君の主張で、道路を避け道なき道を山上

に登ることになり、一列で登ったが途中、姿がスッと見えなくなったと思うと、上半身のみ地面へでているので、“穴に入って遊ばないで早く上れよ”と言った所“足がない”という。10mもあれ野井戸に落ち腕で支えていたのである。体力もさることながら、小山君にとって歩くとは足を地面につけることであった。山での話は数多い。白馬岳に佐藤氏と登山、新雪で道に迷い霧に包まれ遭難一歩手前、ビバーブを覚悟して佐藤氏が足許を見たら小屋の屋根の上手であったとか、伊吹にスキーに行き、初心者コースでは上達しないから中級コースから滑降しようということになり、滑降したが途中で転倒、スキーを流し転げるようにして追跡、運よくスキーを捕え下山することができた。など、山に登ると心から自然を和み愛するようであったし、時も彼に味方した。このようなことから私達は君を山の大人として尊称していたのに、そして自然をあのように愛した君の鹿児島での菱刈鉦山での状況を聞くにつけ悲しみは増すばかりである。

君が学生時代楽しみに弾いていたバイオリンも

* 京都大学理学部化学教室

留学から帰国して以来全く耳にしていない。大学の門が閉ると今出川通を隔てて中華そばの出前注文をした太陽軒も世代が変わった。夕方になると三人揃ってコーヒーを飲んだ万里小路の喫茶店も無くなってしまった。周囲の変化もさることながら、君が幽明境を異にしたことで、院生時代の憶い出に、ポツカリと穴があきやりきれない思いがする。

コーヒー好きであったが、アルコールを全く受けつけなかった君が、最近ビールだったらコップ半分位飲めるようになったと悪戯ぼく笑った顔、5月の筒井夫尊氏の退官パーティーでは、体のことを考えると一切口をつけないと言って忙しそうに退席したその時が君との最後のお別れになろうとは。

佐藤氏と見送りの一番端で送らせてもらった。私達の前を、君を載せた霊柩車が後続車を待たずに進んでいった。“お先きに”と言っているように。“あわてすぎるよ小山君さようなら”
御冥福を祈りながら。 合掌

小山睦夫氏の御略歴

1933年岡山県に生まれる。大阪府立岸和田高等学校を経て1961年京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退官。1961年京都大学助手（理学部）。1974年同大学助教授（原子炉実験所）。1986年教授（同実験所）。1964年理学博士。論文題目「多重酸化状態をもつ放射性同位原素の分析化学的研究」。平成元年7月12日ご逝去。